RSA暗号 Riverst-Shamir-Adleman

情報科学の世界II

2020年度

只木 進一 (理工学部)

RSA暗号概要

- ■整数論という数学の応用
- ■因数分解が困難であることに基づく
- 公開鍵暗号に利用される
- → James H. Ellis (1969)及びClifford Cocks(1973)が理論的基礎を発見したが、 長く秘密にされていた
- 1977年にRSAが公表。

整数の合同

Congruence

- 二つの整数aとb。ある整数mで除した 余りが等しい
 - -aとbは法mについて合同: $a \equiv b \pmod{m}$
- $a \equiv a' \pmod{m}$ かつ $b \equiv b' \pmod{m}$ な らば
 - $-ab \equiv a'b' \pmod{m}$

$$a = n_a m + a$$

$$b = n_b m + b'$$

$$ab = (n_a m + a')(n_b m + b') = (n_a n_b m + n_a + n_b) m + a'b'$$

Fermatの小定理

- pを素数、 $a \not\equiv 0 \pmod{p}$
- このとき、 $a^{p-1} \equiv 1 \pmod{p}$
- → 例示:p = 11, a = 3

$$3^2 \equiv 9 \pmod{p}$$

$$3^4 \equiv 81 \pmod{p} \equiv 4 \pmod{p}$$

$$3^8 \equiv 16 \pmod{p} \equiv 5 \pmod{p}$$

$$3^{10} \equiv \left(3^2 \times 3^8\right) \pmod{p} \equiv 45 \pmod{p} \equiv 1 \pmod{p}$$

Fermatの小定理 応用

- → pとqを素数、gcd(a,pq) = 1
- このとき、 $a^{(p-1)(q-1)} \equiv 1 \pmod{pq}$
- 例示:p=5,q=7,a=11

$$11^2 \equiv 121 \pmod{35} \equiv 16 \pmod{35}$$

$$11^4 \equiv 256 \pmod{35} \equiv 11 \pmod{35}$$

$$11^8 \equiv 16 \pmod{35}$$

$$11^{16} \equiv 11 \pmod{35}$$

$$11^{4\times6} \equiv 11^{(16+8)} \pmod{35} \equiv (11\times16) \pmod{35} \equiv 1 \pmod{35}$$

秘密鍵と公開鍵

- メッセージを受信する者
 - →二つの大きな素数pとqを生成し、秘密鍵 とする。
 - -m = pq
 - $-\phi(m)$: mと互いに素である1以上m以下の自然数の数。今は(p-1)(q-1)
 - $-k:\phi(m)$ と互いに素である適当な自然数
- → mとkを公開鍵とする

メッセージ暗号化 送信側

- <u>−</u> mはLビットであるとする
- -メッセージMをL-1ビット毎の語に区切る
 - $M = a_0 a_1 \cdots a_n$
- ▶各語を変換
 - $-b_i = a_i^k \pmod{m}$
 - $-M' = b_0 b_1 \cdots b_n$
- M'を送信

 $-kv-\phi(m)u=1$ の適当な解(u,v)を得る

$$b_i^{v} \equiv a_i^{kv} \pmod{m} \equiv a_i^{1+\phi(m)u} \pmod{m}$$

$$\equiv (a_i \pmod{m}) (a_i^{\phi(m)} \pmod{m})^{u}$$

$$\equiv (a_i \pmod{m}) (1 \pmod{m})^{u}$$

$$\equiv a_i \pmod{m}$$

- -秘密鍵 $p = 13, q = 11, \phi(m) = 120$
- -公開鍵m = 143, k = 7
- − mは8ビット
 - 7ビット毎の語に分離

数学的裏付けのある暗号

- 確実に符号化・復号化ができる
 - ■数学的に保証されている
- 一方式は公開/鍵は非公開
- ▶素数への因数分解が困難
 - 今のところ有効なアルゴリズムなし
- コンピュータの高速化によって、長い 鍵が必要になっている